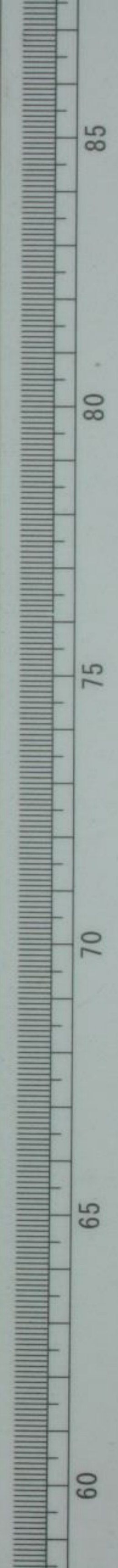




扁額軌範
二篇上

千 4
181
2



扁額軌範二之卷目錄

目錄

田村磨退治夷賊圖

清水寺 海北友雪齋画

。壁二間横六間

行敵居士於靈木附屬延鎮圖

清水寺 筆者不知

。壁一間横二乃半

賴政射怪鳥圖

清水寺 海北忠左衛門画

。壁一間横一間半

附源三任賴政像
襖之圖

七福神戲遊之圖

清水寺 筆者不知

。壁一乃横五間



諸侯行列之圖

清水寺

辻村氏兵衛画

朝比奈素草摺曳之圖

清水寺

長谷川久孫画

鐘加之圖

祇園

長谷川守吉画

。堂一回横一尺八寸

扁額軌範 之卷

速水春曉齋輯

○田村曆退治夷賊之圖

清水寺本堂外陣正面向北向ノ掲

明曆三年海北友雪齋の画横六間堂三間の天繪馬を力九を以て世に

扁額の軌範と称せり 友雪と海北友松の子菫暉斎と号す

坂上田村磨々後三位兵部卿右京大夫贈大納言菊田丸の二男。

源誠天皇弘仁元年正三位叙中納言に任じ同年九月大納

言兼右大臣將任に軀長五尺八寸胸の厚一尺二寸向て見ると體が如く

背てこれい俯をじ眼を蒼鷹に眸はらつ。鬚を黄金の線に似たり如く

重くも時々二百一十行時々六十四行動靜操に應じ。輕重心に任

と怒しに極難も忽ち變じ。嗟を雅子も痛く。面を桃花の毛春を以

て常に紅かり。到節性以持し松毛をを送て獨翠かり武術を世に

て勇威人々踰(文)以(字)まで張良武聖蕭何仁智(漢)事(と)云(い)

傳(つ)云(い)人(ひと)皇(みかど)五(ご)十(じゅう)代(だい)桓(かん)武(ぶ)大(だい)皇(みかど)延(えん)曆(りき)七(しち)年(ねん)奥(おく)州(しゅう)の夷(い)賊(さく)始(はじめ)紀(き)小(せう)佐(さ)

美(み)安(あん)倍(ばい)墨(もく)繩(じよう)以(も)して征(せい)後(ご)も夷(い)賊(さく)強(つよ)して官(くわん)軍(ぐん)利(り)を失(な)ふて敗(くは)る夷(い)

賊(さく)弥(や)勢(せい)強(つよ)大(だい)うて官(くわん)府(ふ)と(と)る(と)は十(じゅう)年(ねん)征(せい)夷(い)大(だい)使(し)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)

使(し)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)使(し)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)使(し)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)使(し)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)

聖(せい)武(ぶ)大(だい)皇(みかど)神(じん)龜(かめ)元(げん)年(ねん)國(くに)府(ふ)外(がい)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)使(し)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)

都(みやこ)に遠(とほ)くして夷(い)賊(さく)の強(つよ)なる(と)なり(と)思(おも)は(し)し(と)時(とき)東(とう)人(にん)法(はふ)寺(じ)の門(かど)より(と)碑(いし)

平(ひら)け降(くだ)り(と)り。就(すなは)ち中(なかつ)田(た)村(むら)磨(ま)の武(ぶ)功(こう)被(ひ)群(ぐん)けり(と)る(と)は勸(かん)賞(しょう)殊(じゆ)厚(こう)なり(と)

日(ひ)十(じゅう)四(し)年(ねん)東(とう)奥(おく)の夷(い)賊(さく)高(たか)磨(ま)并(なら)惡(あく)路(ろ)王(わう)の二(に)人(にん)記(き)て達(たつ)谷(たに)窟(くわ)に立(た)ち

邊(へん)境(きやう)以(も)て侵(か)み。猛(まう)威(い)を衣(い)ふ(と)先(せん)賊(さく)信(しん)大(だい)小(せう)勢(せい)以(も)て張(は)る(と)る(と)は賊(さく)後(ご)州(しゅう)まで

責(せき)上(じやう)ふ(と)る(と)國(くに)より(と)の奏(そう)頻(ひん)なり(と)る(と)は法(はふ)書(しよ)より(と)延(えん)曆(りき)二(に)十(じゅう)年(ねん)磨(ま)磨(ま)王(わう)達(たつ)

田(た)村(むら)磨(ま)を征(せい)夷(い)大(だい)將(しょう)軍(ぐん)に任(たづ)ね(と)る(と)節(せつ)刀(たう)以(も)て凶(きよう)徒(と)退(たい)治(ち)の宣(せん)旨(し)あり(と)る(と)

村(むら)磨(ま)勅(しやく)以(も)て日(ひ)頃(ころ)清(せい)水(すい)寺(じ)の觀(くわん)世(ぜ)音(おん)を深(ふか)く信(しん)じ(と)る(と)る(と)は當(たう)寺(じ)に詣(よ)ぎ

然(しか)敵(てき)悉(しつ)退(たい)散(さん)以(も)て延(えん)鎮(ちん)和(わ)尚(じやう)為(な)る(と)る(と)は勝(しょう)軍(ぐん)地(ち)花(はな)菩(ぼ)薩(ざつ)勝(しょう)欽(きん)昆(こん)汝(にょ)門(もん)

天(てん)の兩(りやう)儀(ぎ)を造(つく)る(と)る(と)は征(せい)敵(てき)勝(しょう)軍(ぐん)の法(はふ)以(も)て田(た)村(むら)磨(ま)を官(くわん)軍(ぐん)と(と)す(と)る(と)は

州(しゅう)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)使(し)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)使(し)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)使(し)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)

風(かぜ)以(も)て起(おこ)る(と)る(と)は時(とき)に陣(じん)中(ちゆう)より(と)一(いつ)僧(そう)一(いつ)男(おとこ)現(あら)わ(と)る(と)る(と)は僧(そう)と(と)敵(てき)の矢(や)を防(まも)り(と)る(と)

は寶(たから)箭(や)前(まへ)を放(はな)ち(と)る(と)る(と)は夷(い)賊(さく)の勢(せい)忽(たち)ち(と)る(と)る(と)は亂(みだ)り(と)る(と)る(と)は強(つよ)く

小(せう)ま(と)る(と)る(と)は風(かぜ)起(おこ)る(と)る(と)は敵(てき)を吹(ふ)倒(たお)す(と)る(と)る(と)は雷(らい)頻(ひん)に震(ふる)る(と)る(と)は賊(さく)中(ちゆう)に墮(お)ち(と)る(と)る(と)

磨(ま)益(えき)勇(ゆう)敵(てき)以(も)て如(ごと)く(と)る(と)る(と)は夷(い)賊(さく)性(せい)風(かぜ)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)使(し)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)

七(しち)裂(れつ)八(はち)裁(さい)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)使(し)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)使(し)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)使(し)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)

磨(ま)以(も)て射(や)斃(げ)す(と)る(と)る(と)は惡(あく)路(ろ)王(わう)を生(な)捕(とら)へ(と)る(と)る(と)は殊(じゆ)以(も)て唱(な)ぐ(と)る(と)る(と)は降(くだ)り(と)る(と)

責(せき)上(じやう)ふ(と)る(と)國(くに)より(と)の奏(そう)頻(ひん)なり(と)る(と)は法(はふ)書(しよ)より(と)延(えん)曆(りき)二(に)十(じゅう)年(ねん)磨(ま)磨(ま)王(わう)達(たつ)

田(た)村(むら)磨(ま)を征(せい)夷(い)大(だい)將(しょう)軍(ぐん)に任(たづ)ね(と)る(と)節(せつ)刀(たう)以(も)て凶(きよう)徒(と)退(たい)治(ち)の宣(せん)旨(し)あり(と)る(と)

村(むら)磨(ま)勅(しやく)以(も)て日(ひ)頃(ころ)清(せい)水(すい)寺(じ)の觀(くわん)世(ぜ)音(おん)を深(ふか)く信(しん)じ(と)る(と)る(と)は當(たう)寺(じ)に詣(よ)ぎ

然(しか)敵(てき)悉(しつ)退(たい)散(さん)以(も)て延(えん)鎮(ちん)和(わ)尚(じやう)為(な)る(と)る(と)は勝(しょう)軍(ぐん)地(ち)花(はな)菩(ぼ)薩(ざつ)勝(しょう)欽(きん)昆(こん)汝(にょ)門(もん)

天(てん)の兩(りやう)儀(ぎ)を造(つく)る(と)る(と)は征(せい)敵(てき)勝(しょう)軍(ぐん)の法(はふ)以(も)て田(た)村(むら)磨(ま)を官(くわん)軍(ぐん)と(と)す(と)る(と)は

州(しゅう)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)使(し)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)使(し)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)使(し)小(せう)使(し)牙(が)磨(ま)副(ふ)

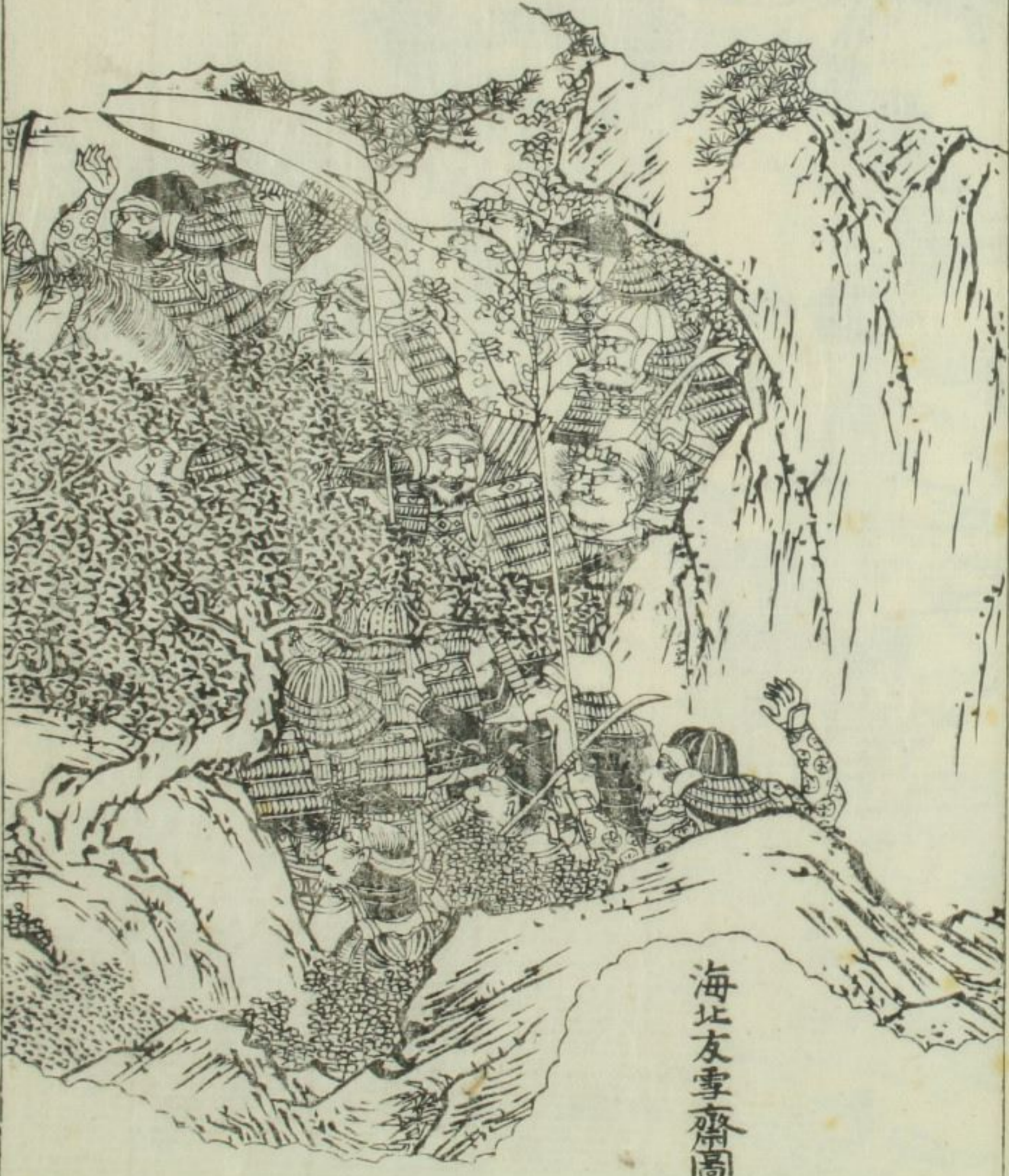
當寺緣起曰
 延曆十四年
 春自東海為
 蝦夷發逆故
 使田村九任
 征夷將軍趣
 勢州然將軍
 詣當寺對延
 鎮曰今蒙征
 伐夷族之勅
 也懇祈鎮誅
 而後退出矣
 然鎮致誠勸



宿坊
 執行寶供院僧都

先清水寺に詣て儼々觀世音の靈驗兩像の靈異和尚乃懇祈
 法を乞ふが故かりて尊像河拜と云ふ兩像の靈驗此の如く有
 可謂不可思議の感應なりと。卷内ありて遂に退治の事なほよく

之處依示現
 造立地蔵毘
 沙門之像而
 祈時二尊有
 出音而向東
 方也然後將
 軍臨戰場之
 砌勝軍地蔵
 現老比丘毘
 矢于法衣毘
 沙門現老翁
 射賊衆又大
 風吹於敵陣
 火雷頓震而
 墮落夷徒中
 是彼敗北焉
 矣然後將軍
 依先李大願
 延曆十七年
 七月二日造
 替佛殿千手
 觀世音菩薩
 遷座右脇士
 稱地藏勝軍
 薩埵左脇士

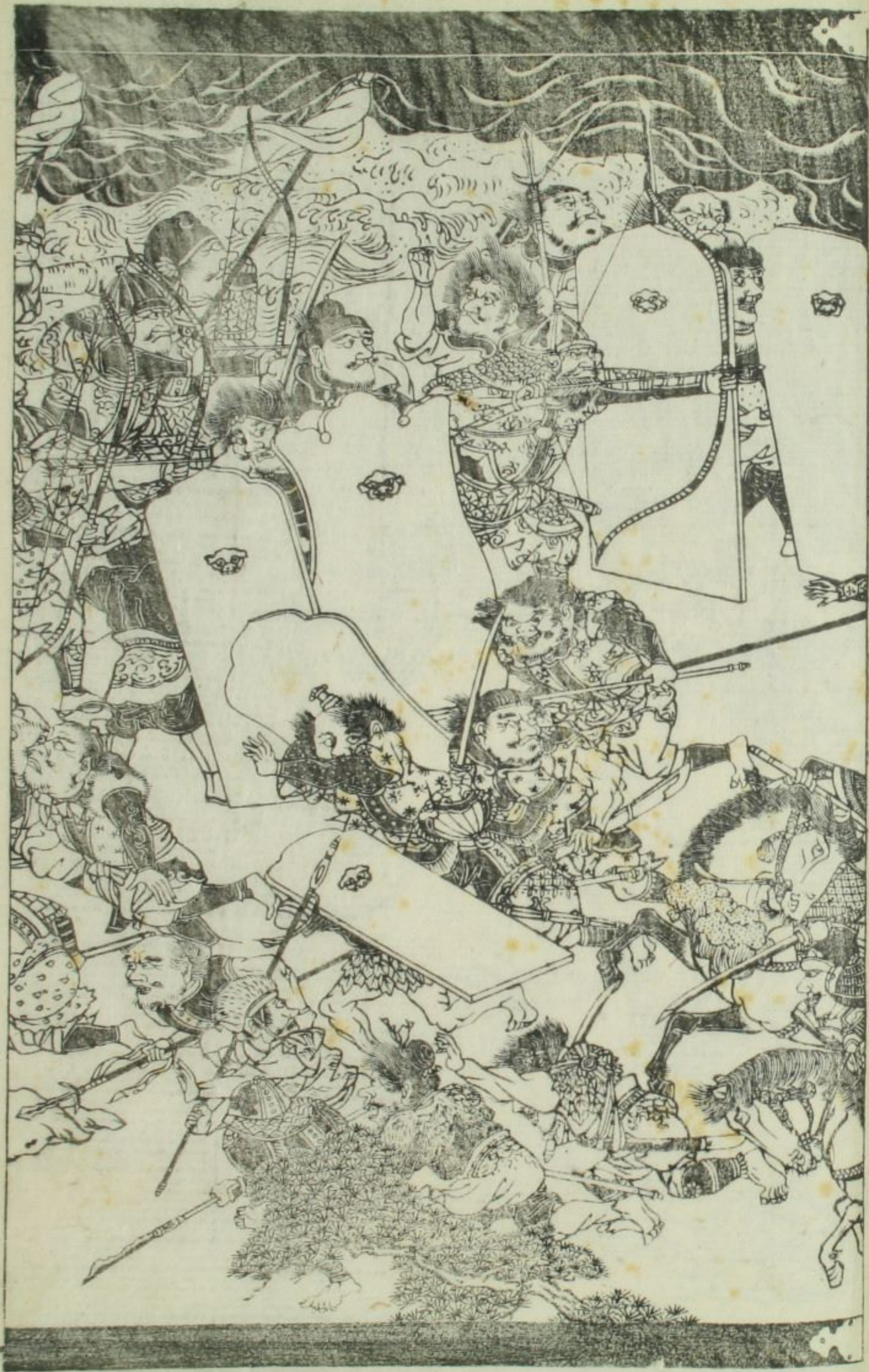


海北友雪齋圖



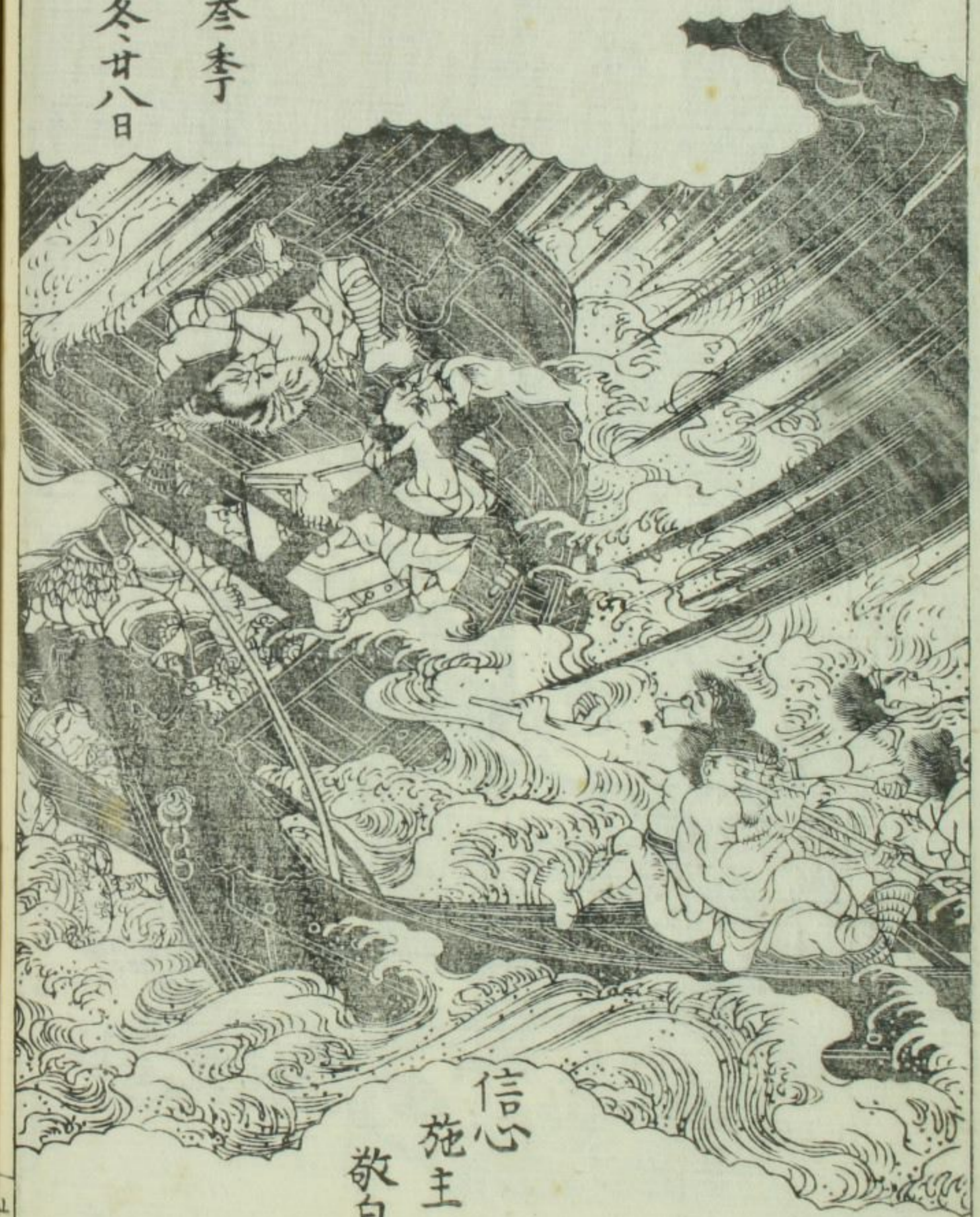
稱多門天勝
敵大士此二
像誅戮夷族
之時現神變
故安置于本
尊一處也







明曆叁季
仲冬廿八日



信心
施主
敬白



田村磨夷賊退治の圖に海内驍馬の壯觀たること
又池ふゆのころに大なる波とて人友雪とて
かゝるやうに舟をこゝろとつとつともそのカワらざる
るまふに人々を舟をこゝろとつとつともそのカワらざる
とるまふに人々を舟をこゝろとつとつともそのカワらざる

春成

觀音の加護延徳和尚が修験によれよ。奏聞有るに帝斜を
ねがへり。田村磨に勸賞は賜ひ延鎮を内供奉に補へり。北觀
音寺の勅額を賜ひ。寺中境内の四至傍るは定免官府と賜ひ。十
七年七月二日田村磨先季の大願にんく。佛殿と造替しんく
昆沙門天地を修善寺の
兩像今奉るの振立よ安ん

○行叡居士於靈本附屬延鎮圖

清水寺奥院に在り

年号不詳 聖堂間横二間半

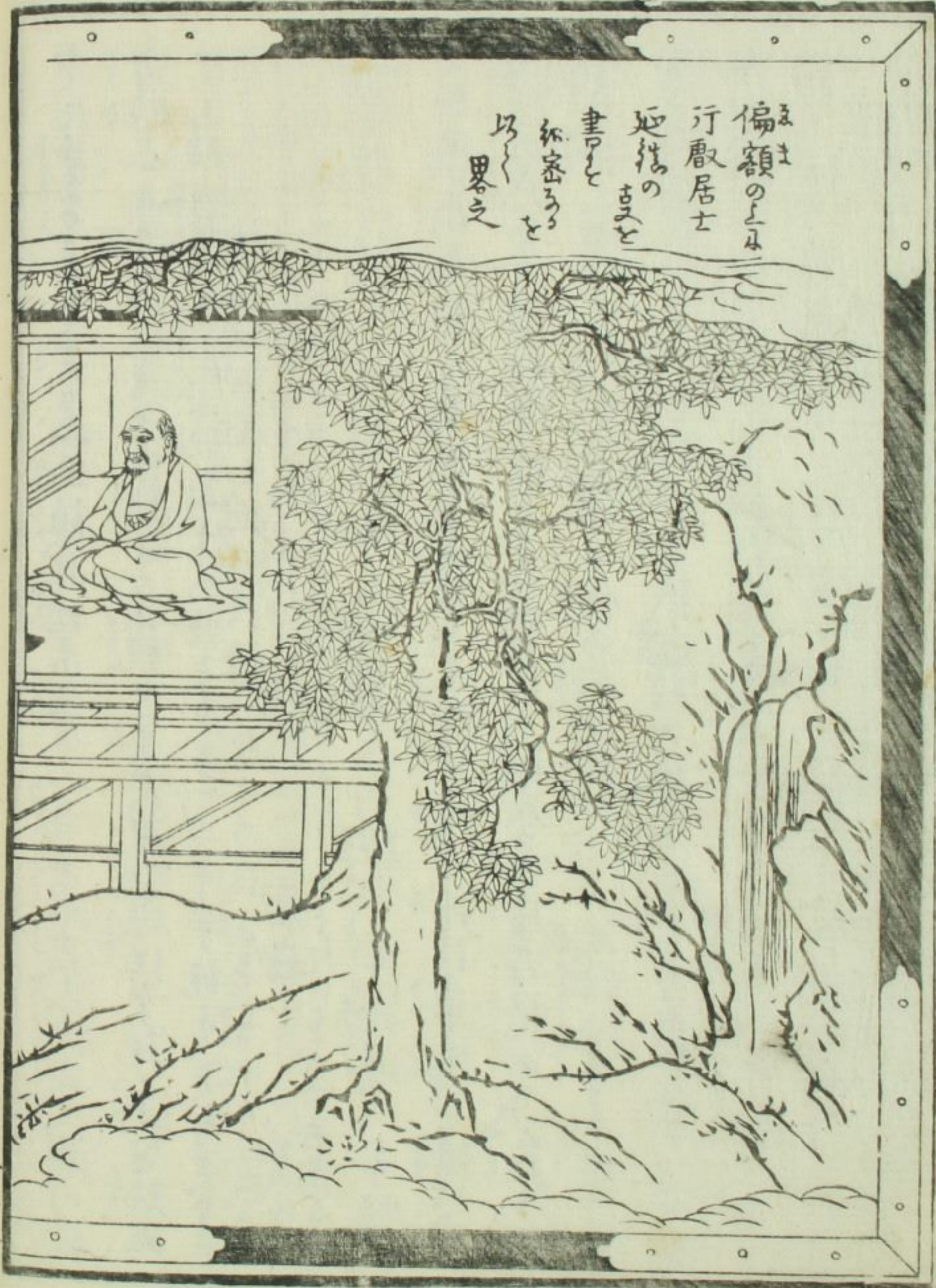
傳云大和國高市郡小島寺に延鎮と云ふ僧あり。常に觀世音と
信し咒を持し苦行練行と云ふ事あり。或は化人夢み告く云く汝
觀音を信じるとして深し本津川の川上に觀自在の靈地あり。行きて住む
しを覺く後告み住む。本津川を游りし乃支流に金色の流あり。
此水源代る到じ。一の滝あり。傍み卍庵を結び白衣と着せり。若
翁住せり。延鎮翁の跡み至る。何人をも問ふ。若翁が曰く。我名行叡。
常み千手の真言は誦しては地に住するも二百餘歳我汝を待てを
久し。善哉来りし支傍の古木は指て云是靈樹なり。大患の傍と造ん
事以思ふ貴僧は地に住し練若は建庵し。我々東國に度の願あり。

少く東方より去りぬ。延鎮此地に住す。一日東の方。山城岡山科の郷
音羽山に至るに居士の履あり。公羽を是大患の應化を我を知らぬ。
今山城山科の牛尾山法教寺の地なり。千手觀音。大智天等の
作と云。狹檀。行叡居士。延鎮法師乃傍あり。後山を音羽と云。音
羽の滝あり。世は清水寺の天院と稱し。古へ伽藍鎌倉の世の再建あり
今乃山上四五町あり。中より大は裏み。今乃の世の再建あり
延鎮廢代取く卍庵に住す。住事五年。桓武帝。延暦二年坂上
田村磨鹿を狩り此地に至る。人跡絶境の地に草庵を造り。肉
涌經の聲あり。田村磨鹿と云。内は麻衣子座あり。僧あり。死も神
仙の如く。田村磨鹿問て曰。僧を何の行に修して人跡絶るる地に住
するや。法言て云。我觀世音代念じ。始く居士が言を法を。田村
磨鹿仰する事深く。田村磨鹿が室尊子。常み疾あり。延法に云く
符を授り。南都み帰る。妻室み法りて符あり。觀世音乃名号
を唱へむ。病忽に愈たり。夫婦觀音の法驗は信し。觀世音



施主
高豊

偏額のよみ
行殿居士
延徳の
書と
紙密ろと
以て
畧之



を建く延鎮み寄附凡延鎮彼靈本も大慈の像材もあらずと
行敷乃示に任せ。觀世音の像は造く安置せん。其像の
長八十一人の僧來り。大悲の像を造く。去る。夢覺て見る。赫奕
た不尊容。圓目あり。漢思く。十一人の化僧。千手十一面乃化
作あり。是は本尊に安置り。今の像こそ是なり

或記云。清水寺も。往昔當國相樂郡。本津川の上。大和國あり
平安城遷都乃後。今の地名移る。大和國吉野郡。滝村も清
水寺の旧址あり。傳云。本津川も。滝村の小川。水源に流あり。清水
寺寂初の地。延法行敷居士も。本津川の水も。金色の光成
為至く。此地より。觀音堂乃跡。今に存と云

延曆三年。奈良の都を山城の長岡も移る時。本尊は靈堂を感
山城國愛宕郡。八坂の郷乃東山。滝水の岸上も。觀音の靈場ありと。

流も。水も。流り。乃。今。金色の光ありて。今。延鎮靈堂後。千
手の陀羅尼空中に。摩由。延に伽藍河造管せん。延思くも。其地
嶮岨。少くも。息乃。一夜。雨降。風。吹。岩。穿。漢。を。埋。忽。平地。と。り
て。其。石。小。鹿。斃。り。是。大。士。の。妙。智。力。鹿。を。殺。地。を。平。坦。と。し。む。即
其。地。小。伽。藍。河。建。之。觀。世。音。河。此。地。小。授。今。の。清。水。寺。と。れ。り
一。流。功。を。延。法。田。村。磨。其。河。感。代。觀。世。音。青。く。宣。い。は。州。愛。宕。郡。八
坂。の。郷。の。東。山。浦。水。の。上。に。觀。世。音。ハ。土。の。屋。場。に。地。は。不。平。伽
藍。河。建。之。觀。世。音。と。安。置。と。云。故。小。共。一。條。河。乃。水。の。流。と
求。り。樂。り。池。の。り。に。到。り。轉。り。岸。上。小。金。色。の。光。と。り。千。手。の。後。延。鎮。靈
堂。と。早。凡。日。年。長。岡。より。本。安。城。へ。遷。都。あり。時。田。村。磨。に。延。法。と。云
勅。して。觀。音。堂。と。造。之。せ。其。地。嶮。岨。の。中。也。平。坦。に。造。之。成
其。兩。階。用。石。雷。電。を。造。之。為。河。穿。漢。と。埋。て。忽。ち。平。地。と。り。即。神。像。と
て。其。地。小。建。之。元。の。堂。河。田。村。磨。と。云。て。田。村。磨。及。其。子。延。鎮。靈。堂。と。云
の。像。と。安。置。り。千。手。の。像。也。延。法。和。尚。住。持。の。跡。遺。像。乃。後。は。石。を
磨。堂。と。後。千。手。の。像。河。安。置。り。或。人。云。往。昔。堂。下。に。延。法。の。土。塔。あり。と。云
今。其。土。塔。も。り。彼。地。河。平。坦。と。鹿。も。西。門。の。内。延。鎮。靈。堂。乃。傍。に。埋。て。是

を鹿同様にとらり

此國近法本津川の川上小櫛々。杉敷居士と對面乃侍を因せり。滝の傍小鹿と馬と。鹿寫塚の因取て画所也。

○頼政射怪鳥圖

清水寺本堂外陣に掲ぐ横一回才壁一寫

寛永十二年 海北忠左衛門画

傳云七十六代近衛院仁平の頃夜に魔嚇をせ給ふ。御寮乃功も夢見。有狼の貴僧。大法秘法代傳せられも。更に給ふ。秋。東之條の森より。黒雲一村をまわり。御殿の上小覆へ必に震ひ魂消らせ給ふ。公卿會集有て源平両家の中より。兵庫頭頼政代撰せられ鳴弦仕と命ぞ。頼政勅宣おとばら小應じ。二重の狩衣小山鳥の尾おとく。矯らる侍。夫二の筋。流るる手に活く。大床小何候以郎等。これを猪早を高直小母衣の風切結。る矢。真で唯一人を具まらり。
總年盛衰記より丁七
唱猪早を二人を具まらり

案の如く御殿の刻限に及んぐ。東之條の森れ方より。黒雲一村をまわて御殿の上小引。霞と見え給ふ。頃玉律を驚し。奉心頼政吃と見上られ。雲の中小怪。容あり。應く矢取。番ハ。雄山ハ。幡宮。河公。裡小行念。一。備と射る。過。云。撞。鷄聲。鳴。嘗て御殿乃上より。庭上に。腫と。墮。猪早。走。寄。取。押。柄。拳。も。透。九。刀。ま。て。ぞ。刺。り。堂。上。堂。下。の。人。松。明。火。照。り。て。見。其。頭。を。猿。尾。を。蛇。と。足。を。虎。鳴。声。を。鷄。小。似。減。小。怖。後。怪。物。あり。御。殿。の。餘。り。獅子。王。の。御。劔。年。が。作。を。賜。ふ。打。節。郭。云。音。佐。々。れ。は。う。治。た。大。臣。頼。長。卿。
一。郭。云。々。々。も。雲。井。よ。わ。く。う。水。と。流。る。を。頼。政。月。と。お。後。月。お。り。て。方。張。月。比。射。ふ。ま。ま。と。せ。て。と。は。る。怪。物。は。清。水。の。岡。小。埋。ら。う。と。云。又。二。條。院。の。時。鐘。塵。鳴。く。宸。襟。を。愠。し。孝。先。例。小。任。く。頼。政。射。之。此。度。を。用。衣。代。賜。る。や。て。五。月。宮。名。と。あ。ら。せ。存。今。昔。子。一。信。れ。は。け。

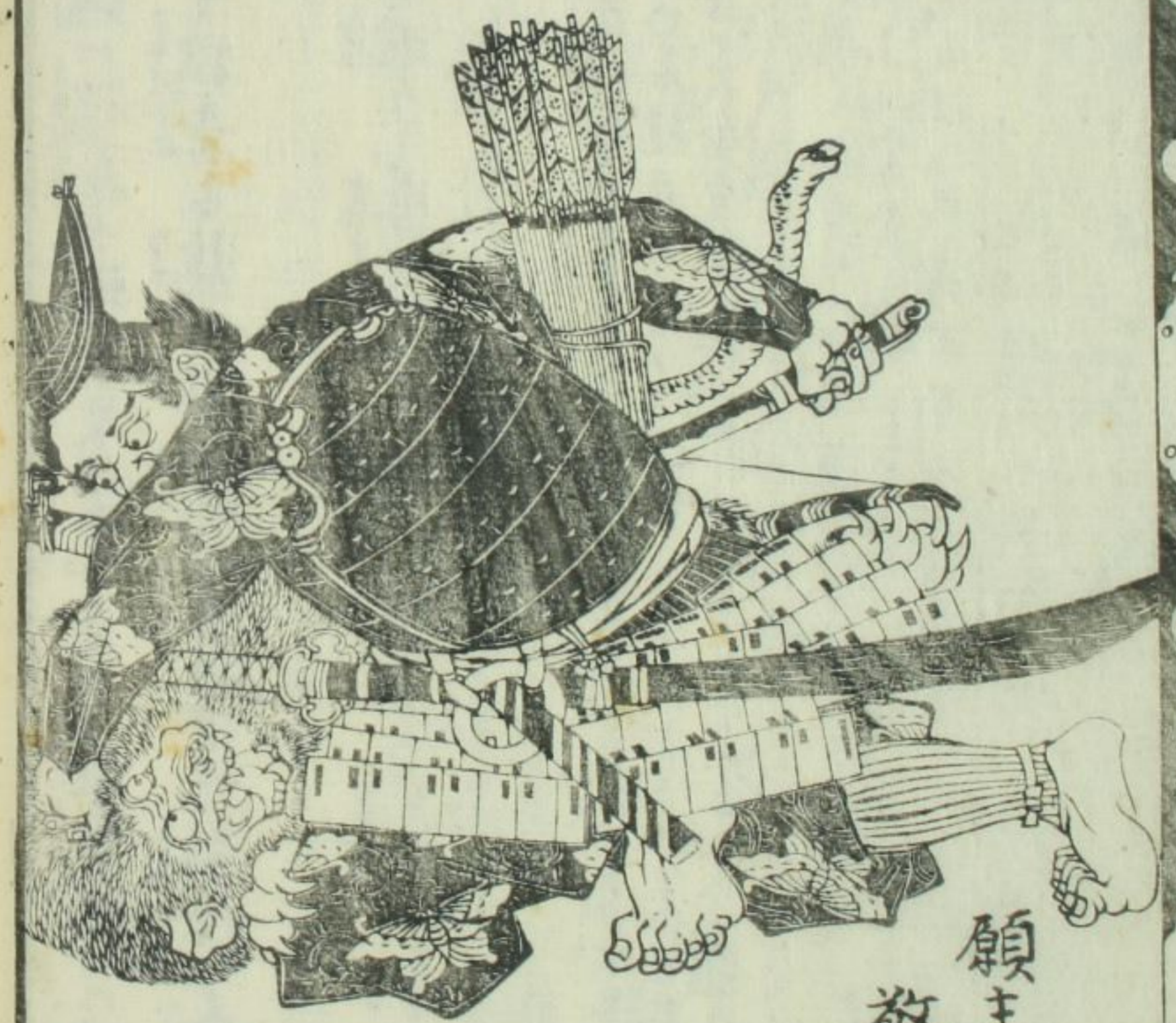
寬永十二乙亥年六月吉日



宿坊成就院

海北忠虎筆

奉掛御寶前



願主敬白

備くや... 左... 清... 南... 羽... 羽... 羽... 羽...
 情... 情... 情... 情... 情... 情... 情... 情...
 應... 應... 應... 應... 應... 應... 應... 應...
 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何...
 名... 名... 名... 名... 名... 名... 名... 名...
 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一...
 が... が... が... が... が... が... が... が...
 石... 石... 石... 石... 石... 石... 石... 石...

按る小頼政鷄を射... 載日並... 台記... 載日並... 載日並...

又日月六月十八日戌戌... 破人屋此... 又日月... 破人屋... 又日月...

又日月二十四日甲辰鷄... 是等... 是等... 是等...

和漢三才圖會
 虫之所の鷄之圖



身春の末より... 洛東... 山海... 雉...

康治... 鷄... 或云... 和漢... 如... 夜... 声...

○武者物語云。於改自害の時即等々向く云。我白骨氏平々復々廻る。其如く白骨氏首にかけ
 頭髪も入使首掛け。法國と稱ひさくしと云。其如く白骨氏首にかけ
 て渚國ハめぐり下流國古河と云。如く云。休む。まゝに死せしむる
 首ふ。魚んと云々れどもあや。其即かと思。海の底にとま。ま。ま。白骨氏
 納。失其如。な。彼。即。等。も。是。と。修。む。こ。ま。い。と。な。り。て。其。如。く。死。す。今。あ。ら。わ。り。て
 古河。水。に。沈。め。ら。れ。り。今。い。ち。改。曲。偏。と。云。終。念。言。死。日。之。即。等。と。猪。鼻。と
 ち。と。云。○長。河。平。年。に。物。物。東。流。盛。長。私。記。し。改。政。死。生。知。さ。る。あ。り。て
 と。載。り。ぬ。り。改。政。思。は。く。古。河。水。に。沈。め。り。と。云。る。や。
 ○美。濃。岡。山。縣。即。上。北。村。に。於。改。政。首。塚。あり。傍。に。改。政。首。塚。と。り。改。政。其。後
 散。灰。置。く。水。と。地。は。在。國。に。ま。く。又。法。國。は。も。ろ。け。休。め。改。政。は。改。政。の
 故。本。を。ま。て。其。改。政。其。後。ま。ま。云。改。政。を。友。に。埋。す。も。奇。と。す。ま。ま。と。改。政。の
 葬。り。一。つ。改。政。は。金。光。山。運。轉。寺。と。号。す。年。と。強。く。寺。廢。り。寛。文。の
 時。石。川。光。正。塚。上。に。碑。を。建。す。故。と。林。道。に。去。擡。す。

○七福神戲遊之園 清水寺西之方廊下西向本招く

正徳二年とあり

世に七福神とて民家は河を信じて幸福の行る下流 蛭子 又黒

○昆沙門弁財天 布袋壽老人 福祿壽七神也

○蛭子の日本紀云。伊弉諾。伊弉冊の二神。蛭子と生孫。此神
 己小と威とくも御神。己小。是。天。磐。楯。持。此。神。取。吹。風
 放棄す。而して其船。松石武庫。那の浦。泊る。其後。里人。願。と。ま
 て。お。ろ。其。で。聖。靈。接。り。西。の。又。乃。神。廟。也。

神社。磐。楯。に。松。石。武。庫。之。即。と。号。す。者。を。如。く。表。す。列。は。一。つ。の。神。

武記云。神武天皇。長髓彦と致ひ孫。時。天軍。夫とて。て。成。と
 多。推。根。津。彦。神。乃。持。おの。箱。り。板。石。の。左。右。出。て。あ。る。天。軍
 と。氣。取。降。り。連。賊。と。射。退。く。又。食。人。と。ぬ。食。と。箱。の中。り。降。り。渚
 軍。卒。小。興。つ。又。箱。の中。り。おの。寶。物。と。出。て。其。ま。た。之。の。子。伏。く
 ま。り。河。軍。富。饒。天。孫。之。小。弁。財。天。曰。汝。何。ゆ。と。り。自
 在。神。力。の。体。あ。る。と。推。根。津。彦。神。天。孫。小。書。と。云。く。吾。い。由。あり

神有り後目に是と申今迄は是河回くむる安ふ事と其後天
 孫流く孫の時天孫まこ此由河回く推根津之屋神云昔は
 天祖の始り子蛭子命之神今まき汝の言と助く吾世の富
 幸氏司の暇守く幸得市小賣氏守く幸氏得田の種をまき幸
 とる軍の我を守く幸氏得朝の事氏守く幸と信天下の富と
 神有り往て廣田國に住し今廣田國廣田大社神在在
 西の太神く信は得氏神と移る

○大黒天。天佛有り摩利支天の如くて。兵家者流も其天を
 て軍利と信る。浮屠の是と信て供養を乞。民家も亦小教て幸福
 と信る。佛流摩利迦羅。大黒天神經云。今自在業力以ての故。女
 婆世界も亦大黒天神と號し乃至佛も白く言く。我一切の負之
 无福の衆生に於て大福徳以爲ん。今優婆塞此形現く乃至爾
 時世尊自ら因ら咲と合も咒と流曰。曩曩漢之曇曇。没駢喃。唵。摩
 迦耶。娑婆訶。爾時大黒天神佛も白て言く。若も法の中無生有く

迦耶娑婆訶。爾時大黒天神佛も白て言く。若も法の中無生有く
 此呪代持る者。祇體着は五尺若くは三尺。其形像を刻。伽藍に
 安置し。若くは室内に崇教せば。我七世天女眷属八万四千の福徳神
 等。遣して十方に遊行く。毎日一人を侍養せん。若くは我説く虚妄
 らぶ。永く惡縁を断て。畢竟に還せん。若くは種く珍菓美酒と以て。供養
 する者も。將小甘露。阿伽尼

○摩訶迦羅唐より大黒天神と云。大神力有り。尙無量千歳云々
 ○今潜寺の食厨及び庫門より大黒天は祀。夏は南海宮。神傳云。西
 方に決て表は。或は二人として。神玉の牀と爲り。坐して。金蓮を
 踏く。小牀に踏。一脚踏。坐して。油を。或は二人として。金蓮を
 踏く。莫河。河。神は。大黒天神有り。右代より相美して。是の
 神。神。但食時。是。厨家。毎。香火。薦。む。香の。飲。念。は
 て有。例。

大黒傳教大師は示現して曰く我れ毎日十人をして供養してはす。寺院を度
 んと大師も我れふれ二十の衆候あり。清く水くくともは供養はる。又と入
 黒澤活乃ら比叡山よと各々黒社に建く。漢法神くは日蓮大
 三面の太黒の清文小件の事候。載且云く毎甲子日生黒豆百粒候
 もつて。わあへく見秘え秘也と云く。

○今善道に用ふるの大黒の傳と云く。周礼に甲と稱り。その名も
 と稱らたのゆへ。家と建。兩御も未儀候。踏り。依る日本のお衆。以
 太教を盛の尊署なり。其衣被もまろ。日本のお俗。旧大黒乃
 軟鞋も下に履。華法布祖の似。八待ん。祖を踏。信け。く
 龍とカ。く使。候。甲子の日。用。り。する。大黒。毎。日。豆。

○一説。孫子と。孫。見の。孫。ふ。あり。事。代。主。命。こと。は。神。を。大。己。ま。その。の。節
 子。り。り。高。皇。産。皇。も。孫。獲。く。作。る。事。を。中。國。の。主。と。し。て。孫。子。

父子より大黒の傳は。大己貴杖下の廣。事。候。二。指。は。授。け。云。吾。は。事。候。

千に流。切。あり。大。孫。け。來。と。稱。い。く。國。人。法。め。孫。り。り。孫。子。安。

拍。羽。回。る。百。石。足。之。八。十。限。小。限。と。云。く。○大。黒。大。己。貴。杖。

拍。羽。回。る。百。石。足。之。八。十。限。小。限。と。云。く。○大。黒。大。己。貴。杖。

拍。羽。回。る。百。石。足。之。八。十。限。小。限。と。云。く。○大。黒。大。己。貴。杖。

○大黒天 梵に毘沙門と號す。福德の名四方小園なり。候。又。多。問。と。稱。を。

たのく。臂。は。伸。張。を。地。柱。右。左。の。肘。を。屈。く。佛。壇。を。發。金。甲。を。被。

て。髪。に。女。人。の。肩。に。踏。り。も。雲。と。依。り。も。是。と。擁。也。又。云。く。北。方。と。り。上。

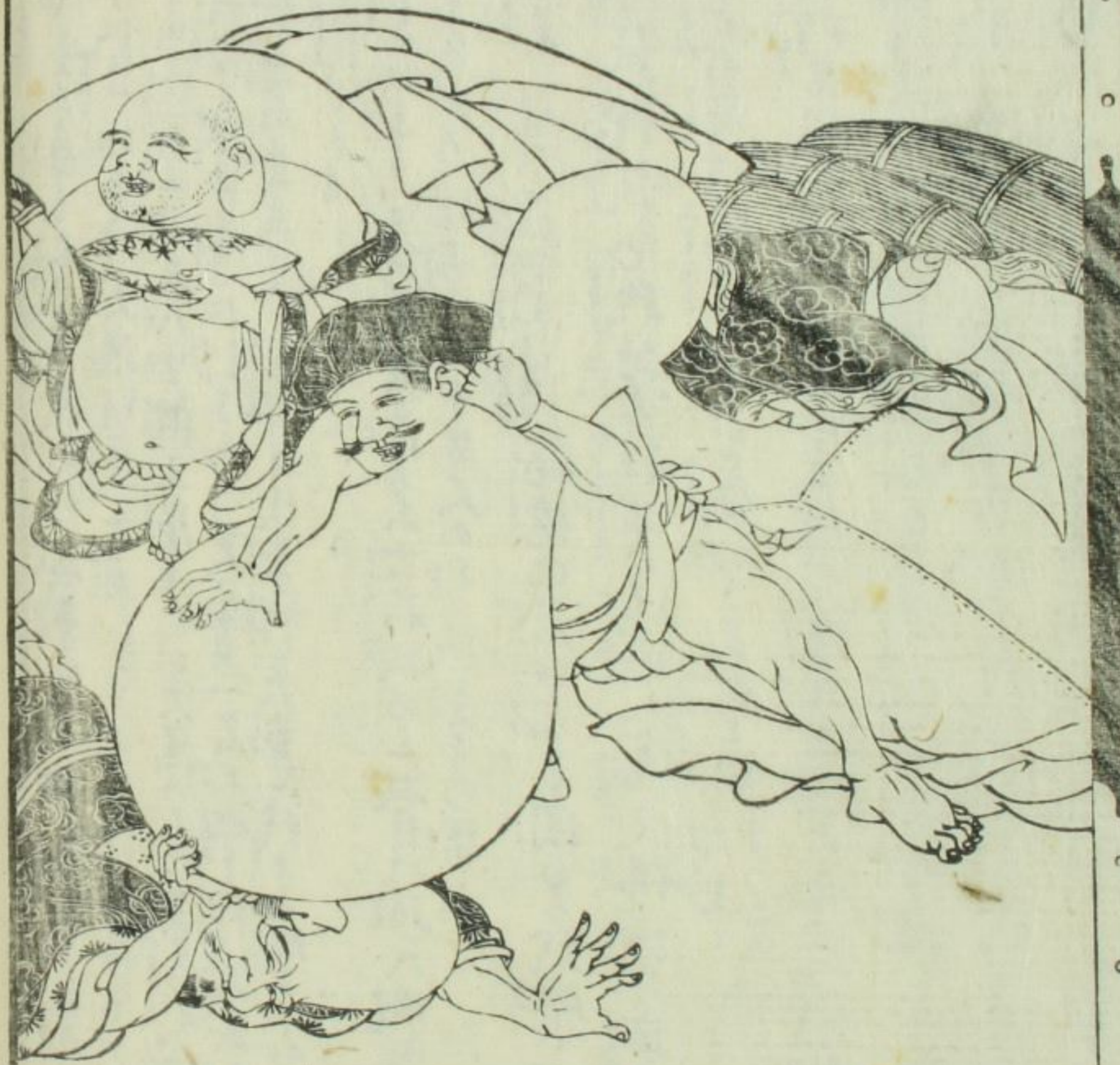
法。華。普。門。品。曰。毘。沙。門。の。身。を。り。得。度。と。人。と。者。よ。即。毘。沙。門。自。と。

現。て。是。に。法。法。現。法。華。義。疏。云。少。方。王。云。云。多。因。と。恒。小。佛。道。場。

と。渡。く。常。小。説。法。法。因。故。多。多。因。と。云。大。論。云。奉。に。多。因。と。云。夜。及。

及び。孫。利。の。主。と。り。宗。隱。云。稱。德。の。名。四。方。に。因。中。の。り。の。故。云。

奉掛御



圖中取たる女ありは、
 於橋と云えり、
 重り、
 御の、
 於福又、
 び、
 移と

寶前

正徳貳年
 辰十月十七日



宿坊
 成就院

於主法田吉右衛門

女の類の
 起脹を
 を於福
 と、
 於、
 移と

又普同と翻る。佛堂に古佛の舍利塔成す。金光明経云々。開き種く開く名く。水精山に居ると云く。般若所掲羅軌云。七宝金剛地甲曹氏着いたの手にと戦と執る。右のよん後と托と一云。及死利の二鬼代踏塔と聲。聲と持成る金色。或は青色。或は白色と云く。

○辯財云。貧乏轉じて福徳圓滿白蛇示現。三日成就。經云。賀神王福徳圓滿陀羅尼經あり。

辨之経曰。賀神王。形天女乃ふ。頂上小寶冠あり。冠中より白蛇あり。其蛇の面老人の如く。眉白く。此則諸佛の出世毎々。身は衆生と利益と得事。羊久瑞相たり。彼此神王と。身白蛇乃ふ。白玉如く。八臂あり。たの牙一。鐸牙。牙二。輪宝。牙三。宝弓。牙四。宝珠。右の牙一。二。叔牙。牙二。一。捧。牙三。二。溢。牙四。三。前。頂上如意寶珠。園光あり。後十五乃王子あり。其形童子と云く。或時と面々にと摩耶氏持し。

或は如意珠代換く。神王乃た右小圍繞り云々

- | | | | |
|--------|------|------|------|
| 十五童子玉璽 | 印輪童子 | 官帶童子 | 筆硯童子 |
| 金財童子 | 稻粗童子 | 斗升童子 | 飯器童子 |
| 衣裳童子 | 蠶養童子 | 酒泉童子 | 愛敬童子 |
| 生命童子 | 從者童子 | 牛馬童子 | 私車童子 |
- 辨之経曰。今時中。賀神王。乃た十五童子。各此咒と説く。大地六及震動く。天より七珍萬宝。天雨と云く。
- 宇賀耶得如。宝珠陀羅尼經云。一切衆生乃存。大良福田と信る。紅徳圓滿陀羅尼經云。此より東南の角。十三神王あり。一より知得神。二より貪欲神。三より障礙神と云く。悉如く。本生の所相。説く。此より乃。法佛の生。憐愍のく。先本。其の福徳。愛敬代。説く。天益の頂上。天房。如く。其福と説く。時中。賀神王。頂上より白蛇と

冠りころの貪欲神と降伏せんがた右のたに利殺と持の降伏神と降
伏せんがたの如き宝珠持々。純潔神代降伏せんがた。異の方
へ向く皇代渡るるも。

若此神王に供養見んや欲の白月一日より十五日に至れ 神傳一日三日
五日七日十日

晨土口又八日十四日 若白月と仰ぐせば毎日己亥日と用ひしき

○布袋和尚 傳於縁よ云姓氏詳も長汀子号く寧波四明
の僧なり。奉化縣の岳林寺にあり。形肥額豐之腹垂傍於傳と異之
事よ杖たり。布袋と擔九供身の具そく其中に貯へ市小出て物
とく魚鱸以嬉り得るべ則ち袋に入。飢も睡んも必食も雪中り
雪も卧も身代泊る人々も奇と人々も吉言と云ふ。あるは聖
應じて感半さく隨ふ不偈外二人とす。温るる後と著途中
漲行。尤早よ即ち高嵩の本殿と曳膝と坐り梁の貞明三

年岳林寺の東廊下の盤石に端坐して住し其後他州の人有り。師
の亦布袋と負く杖を見る。皇本に四衆競く其像と因に今岳
林寺の大殿の東堂に金像現に存す。

○禪家布袋の像代安じり此謂り

按じり布袋和尚と稱し稱と名を知らば其像知く周り
笑代合々萬人のむを代はるが故に福林と稱する。又悟り付る事
事と知る是を知らる福人なり。幸權化の教をすて捨言異述世ふ
孫結と信して福代はるが故に云はる。

○布袋と名する人見んが四君子教れ知ると有り。凡人は對しては

今二月初午の日京師福新の住僧人土偶人の布袋と号す。筆
の上刀柄小安れ。これを布袋と稱し。七箇子乃ん
を吉慶と名す。氏永七年夏すて七箇子乃ん
を七箇子乃ん。其七箇子乃んを社法と納め。又初の七箇子乃ん
七箇子乃ん。竈と厨下の前ありて厨下より目のおろすべ
なり。布袋の笑るる像と安じて教あるは衣衣の滑るるん

○壽老人 南極星式。南極老人星と云。南極人の壽と云。

老人星と井宿乃分あり天文書云秋分の旦丙子見春分の夕
外小及以孤の星乃名の南極界なり明入る時を天卜安寧
なり然るに其此星人民の壽算代主極地入るを
三十六度得見べし故其極地出以見る其地と出
又又甚遠うは

風俗記云宋の元祐乃宿系に一老人あり長と人首えと相
あり秀同豊舞幅中極服トとぬ日市に極を極を極を極を
飲む或之其首以叩て曰吾身は壽代益以聖人なり一日中官の
見異なりやして其形を因して上と養と有あり内政に
て上同終今幾年ぞ老人の云は南方より来る酒は飲て能
言ふ遂に是れ初て飲む一挙一石往々て云く黄河屢清を
見る上眷方に涯一俄其其人を逸に但首は清風庭は満白雲

室に映むるの羽衣を子奏し終ふ壽星乃躔空は帝座に
聯る上益々終れ異々終ひ方知る見る所の老人とをわらわ
るるや採訪と道ども竟に得べし其國代取賛して曰老人
星其老人星一朝醉酒走天庭黄河屢見清於世試問長生
不見形

○福祿壽 今圖この玉以見ると其長首えと相すは終く
傳云邪和璞後南に座に人の如く算るれ術をわたり暴死する
者を活に道は多ぶ者多し一日才子罹暎は滑く云異客まある
とや日異く一人至る身は長五尺濶さ三人首其半にあり緋衣は勿
を扱く算代終く人老れ勿は南身は後して劇終と多く人の
語を解は罹暎越く庭とさぐ客熟行くと璞小滑て云く
泰山老師にあつてや日然る食畢て去る和璞暎に滑て云く

上帝り。後に戯てより泰山若師と云子復往く首や。曙日。向小先
生の言と同小。其の恭山若師の後身と然ども。前身記とこと
に。撲後小の。其の如く。はとこと

按に壽老人を因とる。付と老人の形を寫し。傍に鹿及鹿鶴と画
鹿音係。鹿鶴と其壽を取。福祿壽と因とる。其形首元と相
半とる。此像と寫し。風俗記に載る。不其然と首元と相半とる。以南極
老人星と其。其の如く。壽老人福祿壽を一體とる。

○或説小七福神の内福祿壽を三として吉祥天あり

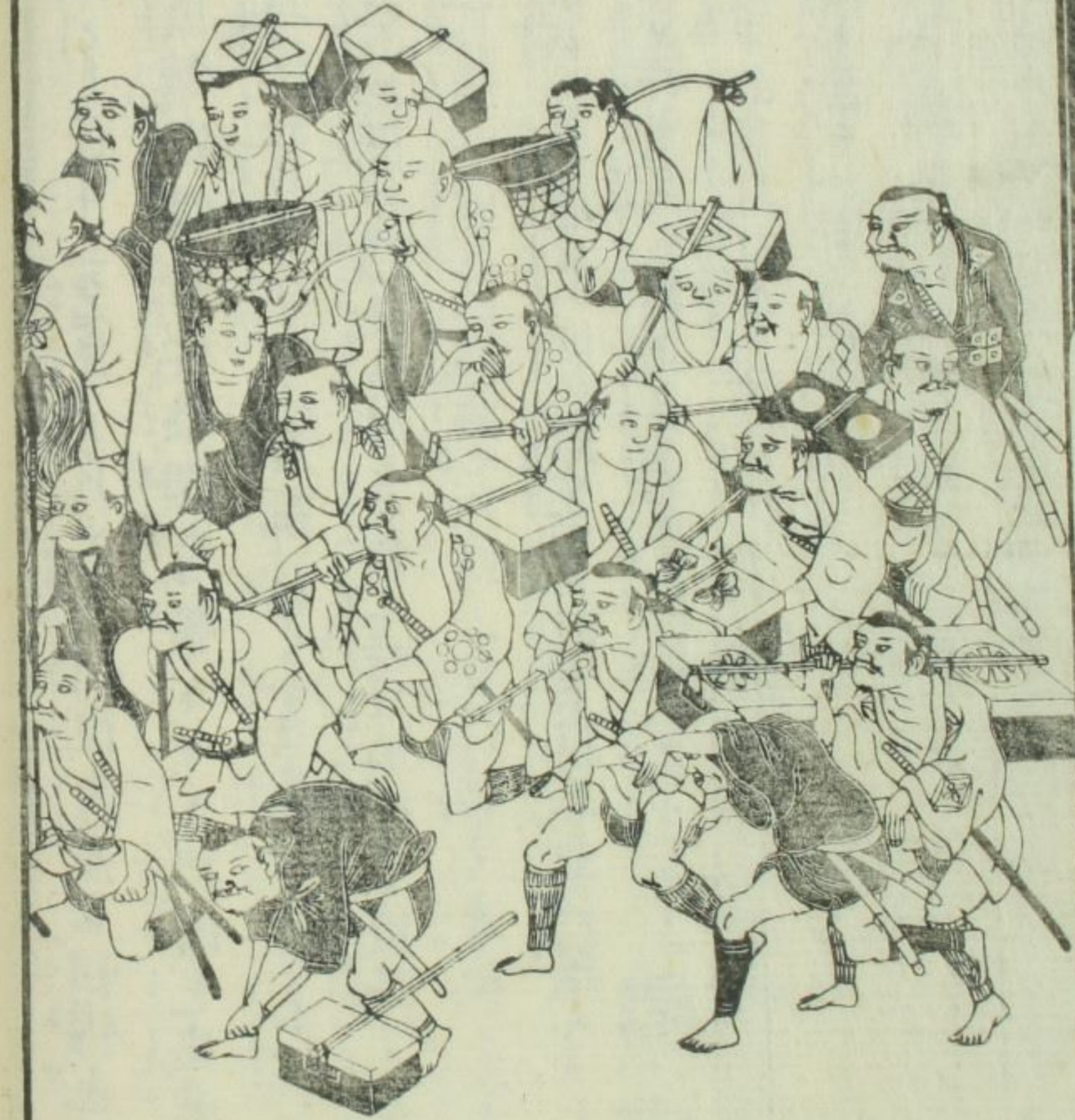
○吉祥天と仲況又吉祥天女十二名跡經曰。此大吉祥天女の十二名
跡をわく。能く受持し。流彌佛智。佛喜し。他乃不況。能く一切災
窮業障を除く。大面芝。其鏡に射宝以獲ん。不謂吉慶。吉祥達
華。嚴飾。具財。白色。大名稱。蓮華眼。大光曜。施食者。施飯者。宝

光大吉祥。有十二名号。又大吉祥陀羅尼云。怛囉也。佉室哩
拈室拈。薩嚩迦。哩野。娑。駐。顛。悉。顛。々々々。阿。洛。乞。史。若。曩。捨。野
娑。嚩。賀。此陀羅尼及び十二名跡能く貧窮一切の不祥と除ん。有
不の願求。皆因滿。以得ん。若。若。若。若。夜。之。時。に。此。經。を。流。彌。し。每。日。之。遍。し。
或は常か受持して。同らに。饒益心。以。持。して。力。に。隨。く。度。滅。は。大。吉。祥。天。女
菩薩を供養せば。速小一切の財宝。豐饒。吉祥。安樂。以。獲ん。と云く
金光明經。吉祥。天。品。云。法。無。量。百。千。萬。億。の。流。生。を。して。渚。乃。快。玉。以。受
し。乃。至。須。弥。衣。披。飲。食。資。生。具。具。金。銀。瑠。璃。磚。磑。碼。碯。珊。瑚。琥珀
真珠。等。此。宝。悉。く。元。至。し。めん。と云く
渚天傳に大功德天と云。其福瓜。能く世出世間一切の福。能く成。就。せん。と
欲。せ。此。天。を。あ。ま。り。如。く。か。く。故。小。石。以。頭。して。注。其。不。求。令。得。成。就。大。功
徳。天。と云

承應六年

傳云行列を
信長の時不
法度の如く
おとし人殺り
多し流罪を
定免給ふ

○奴隸の天頂の時代
を利比乃ひ類と



も利比乃ひの
形勢此方と云ふ
せん其頃の風俗
なり類後と云
ふの類後と云
ふと云ふ類後
は又元禄の頃
からいふと云
ふも云ふ類後
しる奴の品あり

○委成えはるの供
とてたをたとふ
おとし人殺り
多し流罪を
定免給ふ

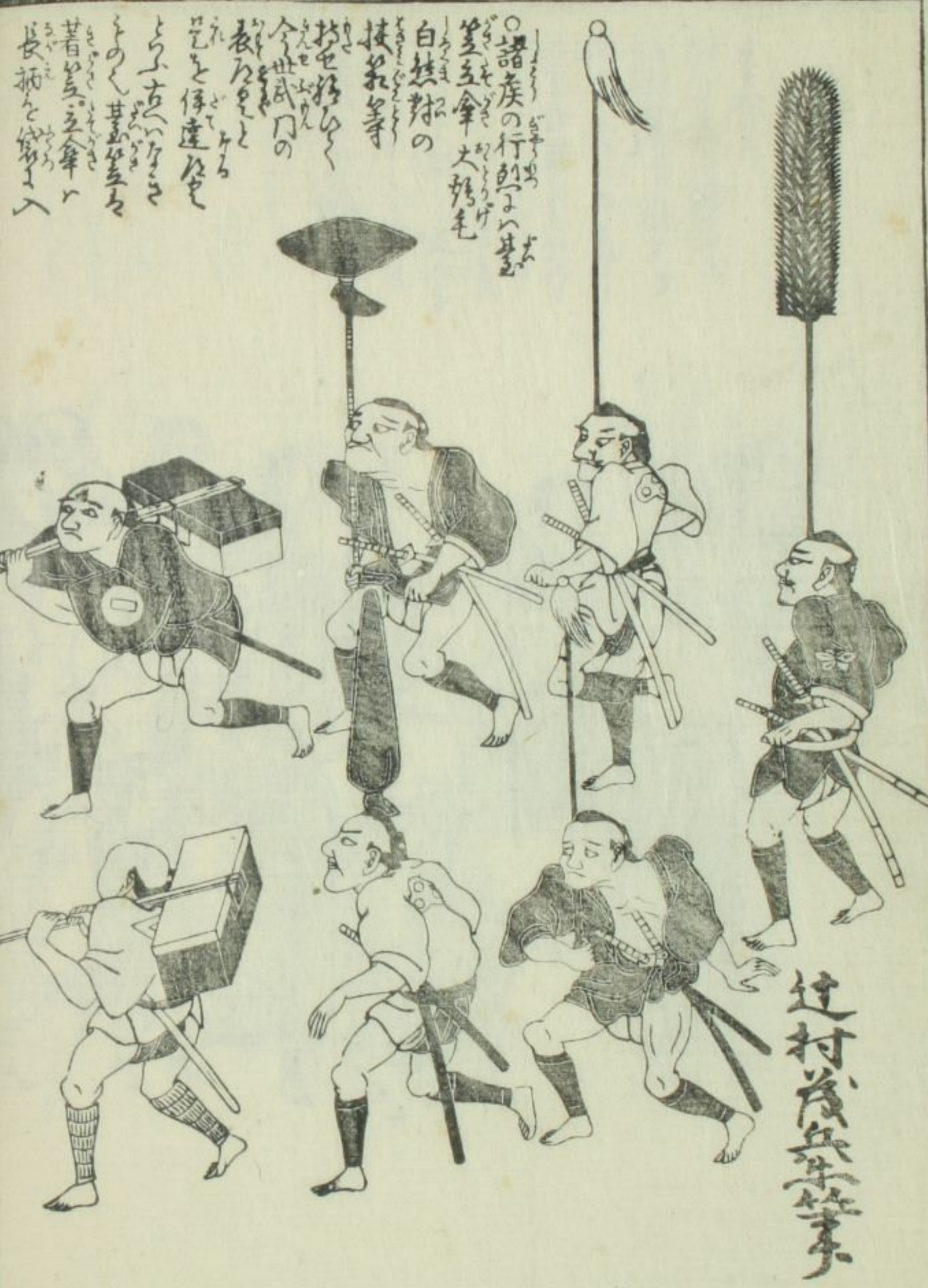


○春成云々
 けいおの申小右左衛門
 招きを佩する魚を
 ともてう冷見安ん
 けいおの申小右左衛門
 佩する魚を招きを
 衣紋の手すりにして
 袂のくもももの
 あらう



○春成云々の末の
 棒よりなるてんも
 慶長より素應の
 比の古に画とてんも
 昔ののくくく画
 たりもあちやまを
 或古寺やくくくへの
 全あわくくくくく
 下く棒よりなる
 是もくくくのおく
 古ののくくく遠
 ものとてんも
 ○刀の柄をわかれ
 のおまきりもも
 へくくくくくく
 ちん



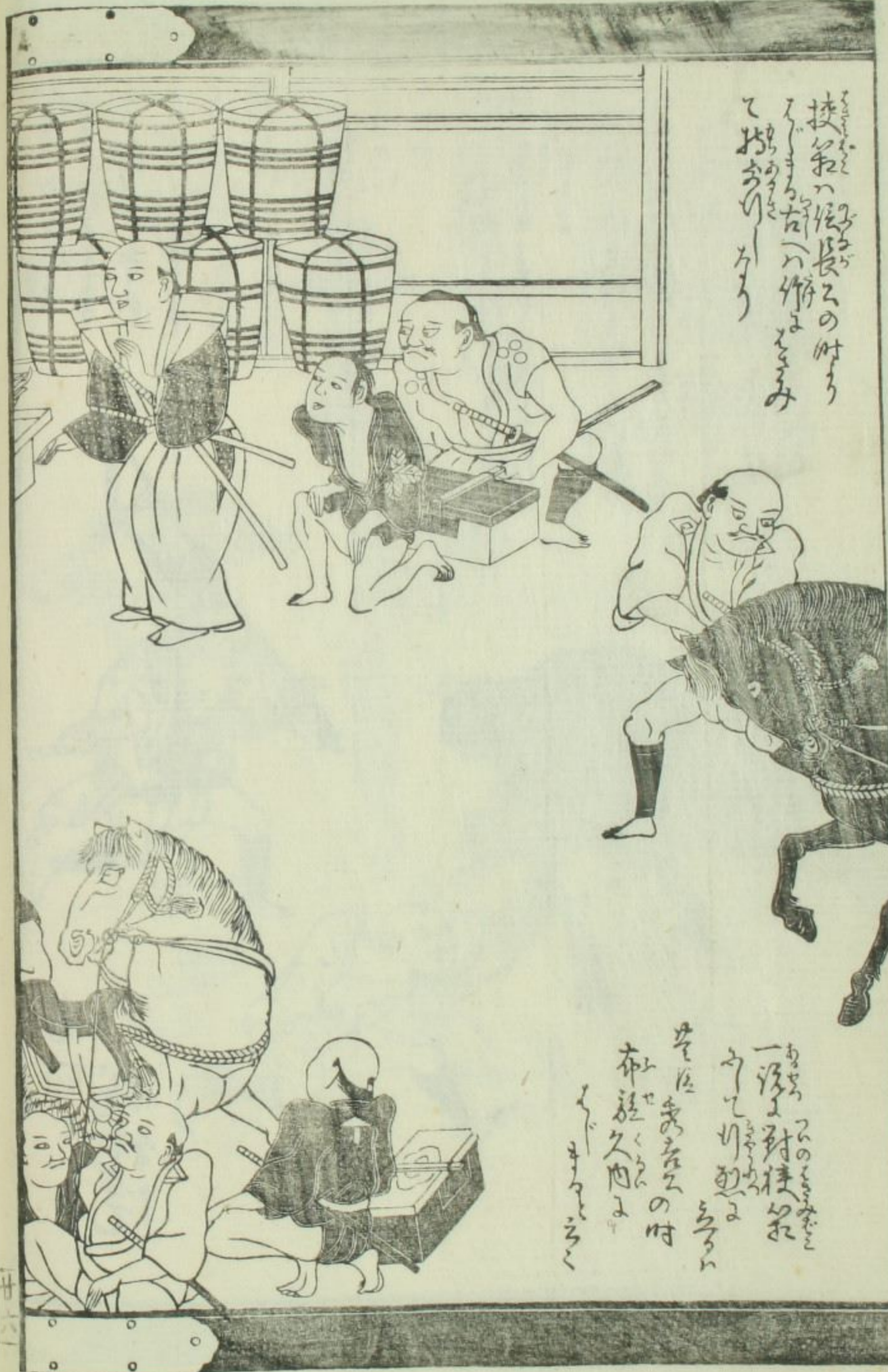
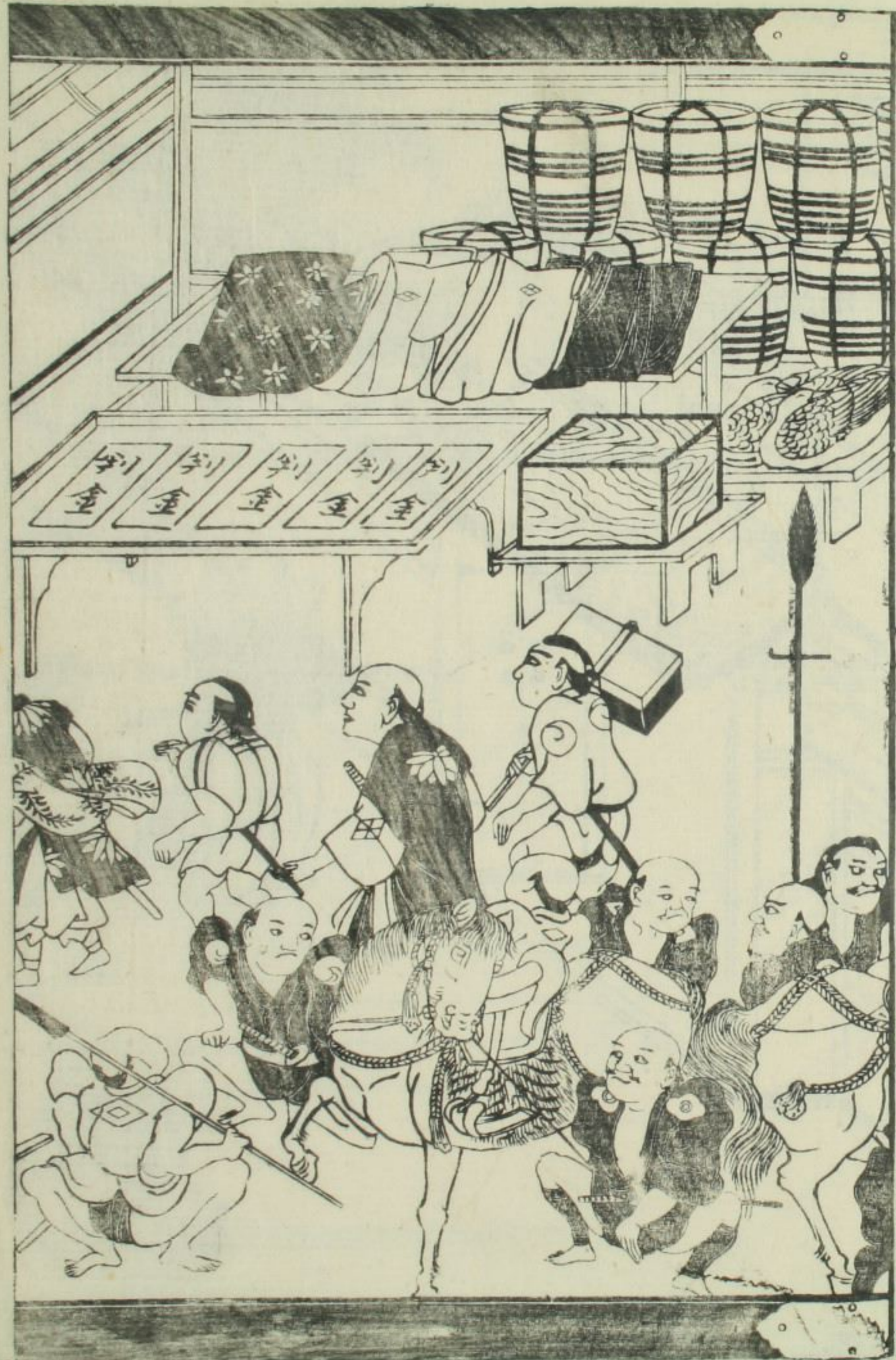


本年仲夏甚暑なる
 疾の持るをいひ
 衣袂の夏藤をり
 人の目代をせり
 糸をみ言に修造が

子掛り夜前

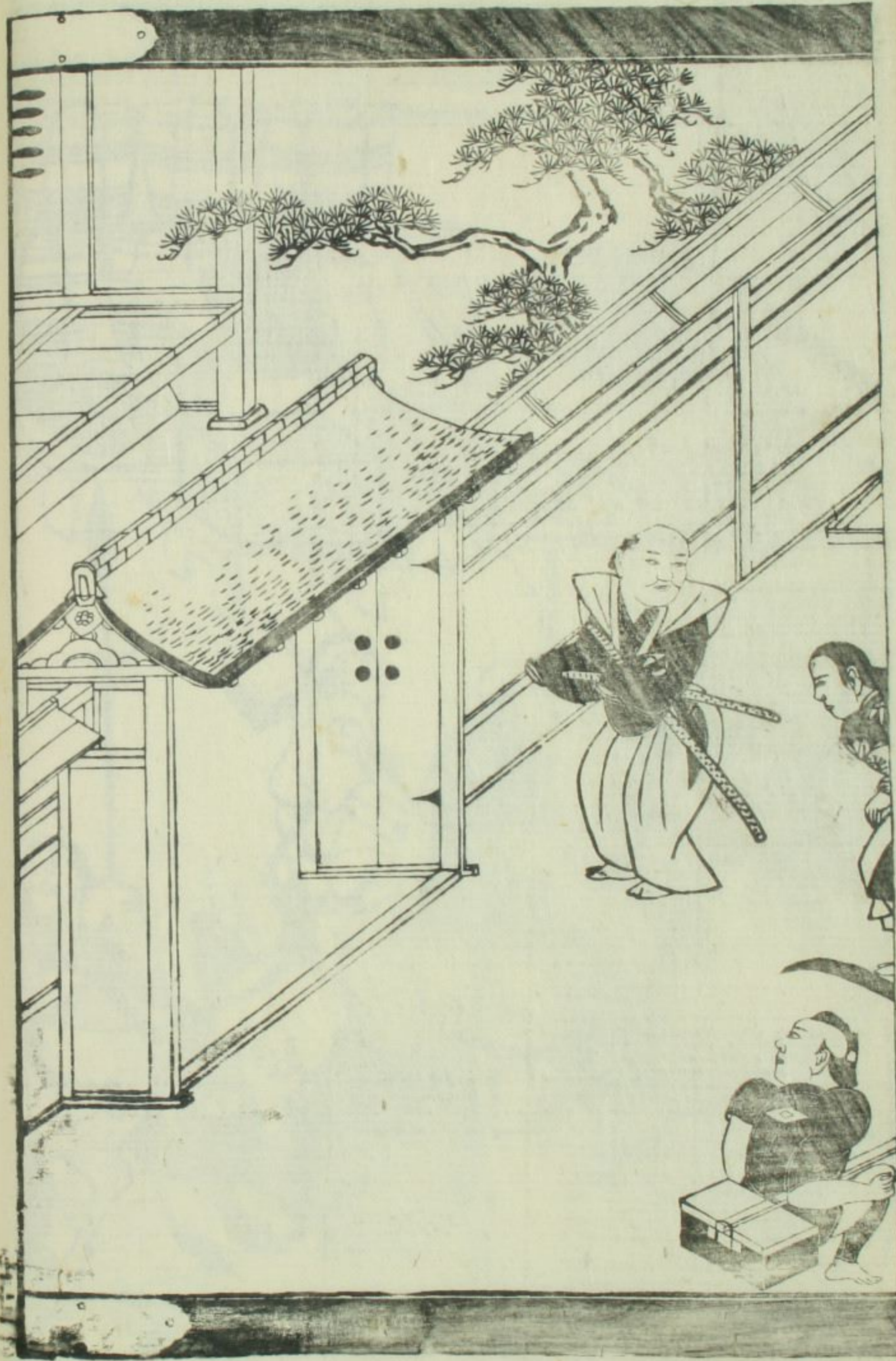
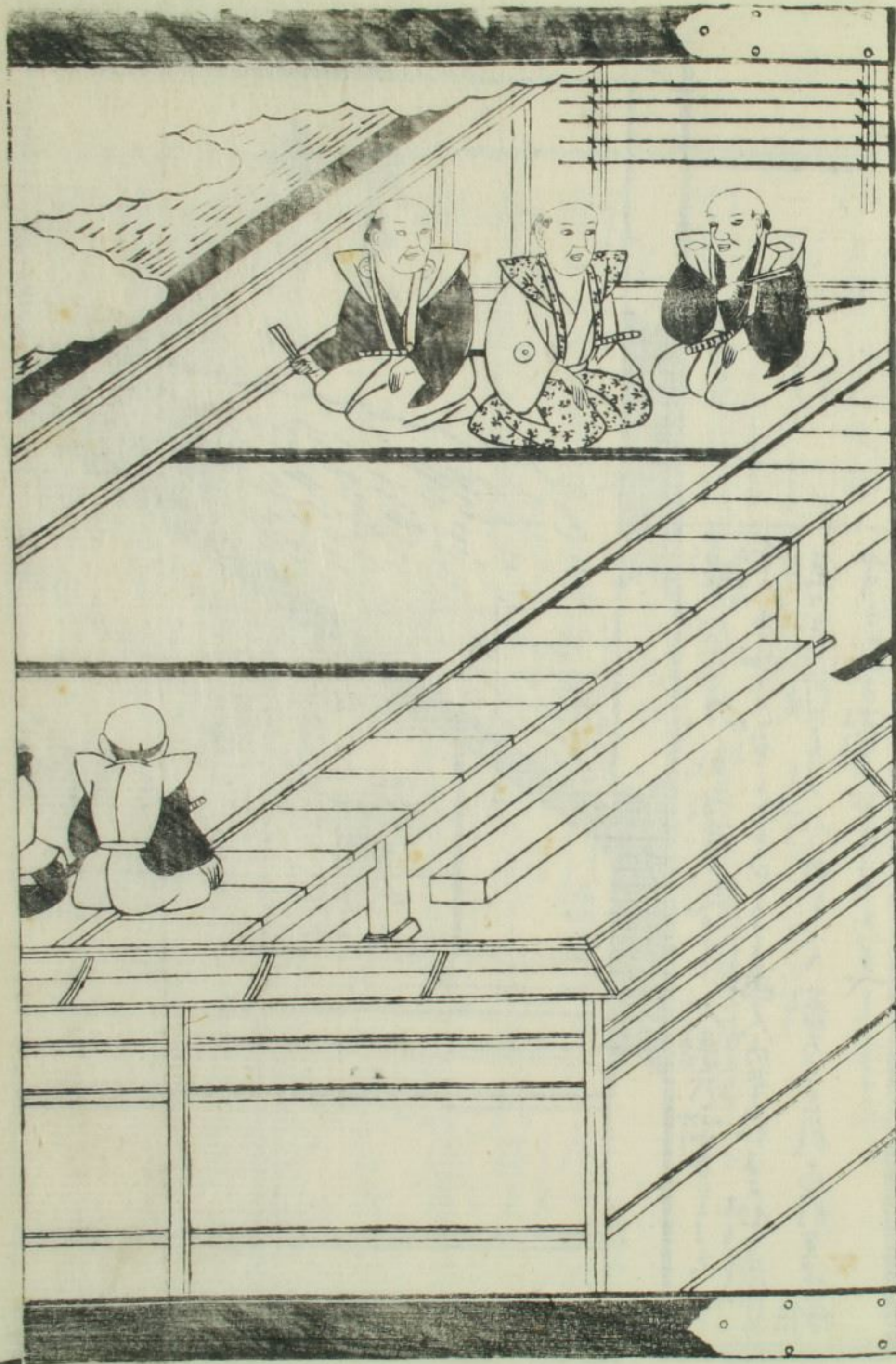
乃長 玄而より後立孤なるもの
 何と云ふもいふ今風流より修造
 の呪言する
 のはおろし修造をいふく修造の
 院まま馬の進縁とていふおのよ
 らうけまの質朴の子向をり
 修造は細く修造と列のよ
 修造は修造の修造



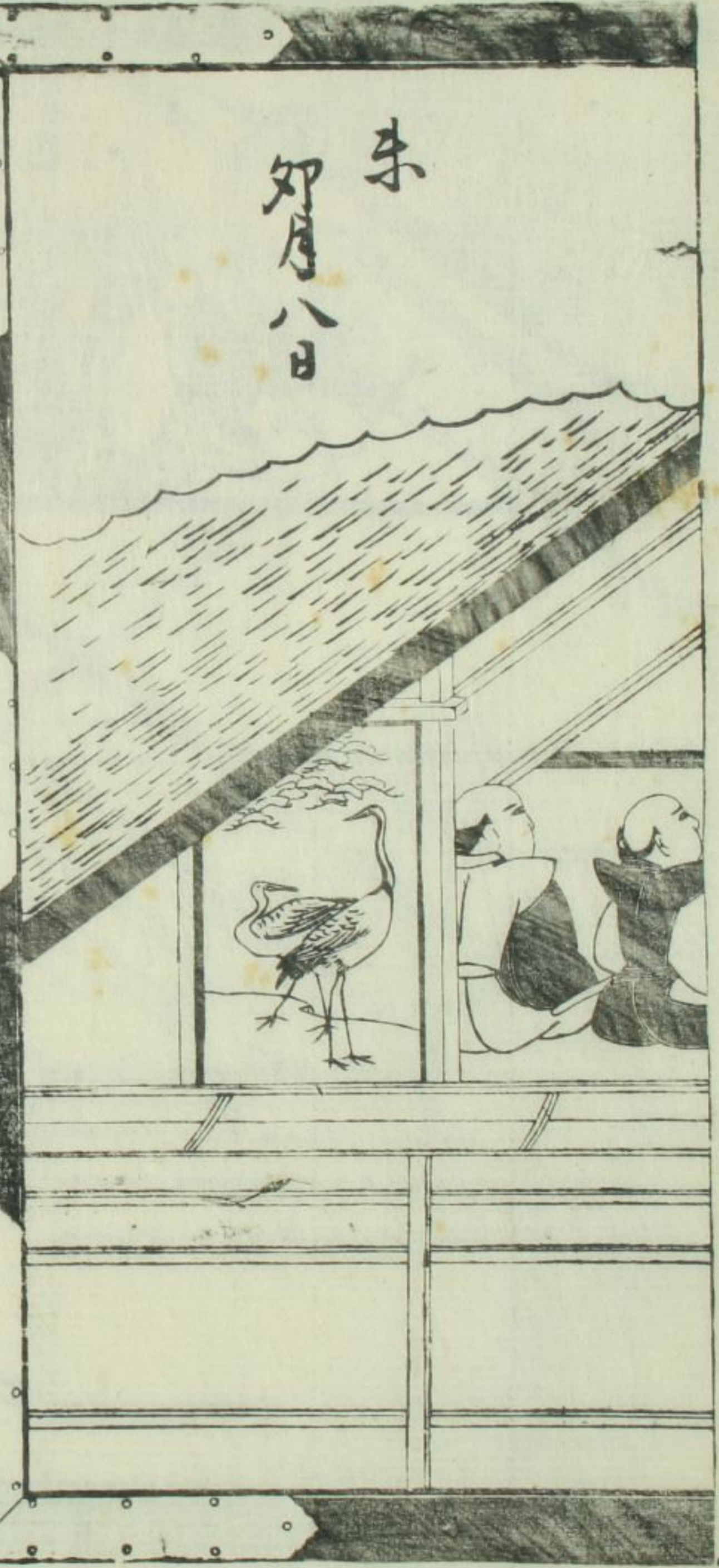


技師の長女の婿
 婿の長女の婿
 てお金のりかろ

お金のりかろ
 一袋の婿
 婿の長女の婿
 婿の長女の婿
 婿の長女の婿



未
卯月八日



長谷川久能画
清水寺本堂外陣西の方西向を描く
兼應四年 辻村茂兵衛画
更に画中に記す
○朝比奈宗草摺曳之圖
清水寺本堂外陣を描く
天正二十年
傳云建久四年和田左衛門義盛一騎引連下姓團にほんて大嶽を
通り黄瀬川乃亀鶴の旗の少将大塚の虎とて街道一騎遊若あり
一騎御あり通んと遊若が水より入るに長斜を以て必ひ虎より
ぬ遊若と十餘人を呼んで酒を飲む。義盛は娘元給は宗之郎義主の
御殿に嫁し義主は妻とす。義主は生れ。古郡左衛門種氏を始に一族
その後八拾餘人居並びて酒宴を修及此虎とて遊女の曾孫結成との
事あり。其り以て今日も成の山くは和田が成の山に繋ぎし。義
盛は志虎の出らざる虎と興し。遊若は止む出らざるを得ぬ十郎が振舞

○大名行列之圖

兼應四年 辻村茂兵衛画 更に画中に記す

○朝比奈宗草摺曳之圖

清水寺本堂外陣を描く
天正二十年 長谷川久能画

傳云建久四年和田左衛門義盛一騎引連下姓團にほんて大嶽を
通り黄瀬川乃亀鶴の旗の少将大塚の虎とて街道一騎遊若あり
一騎御あり通んと遊若が水より入るに長斜を以て必ひ虎より
ぬ遊若と十餘人を呼んで酒を飲む。義盛は娘元給は宗之郎義主の
御殿に嫁し義主は妻とす。義主は生れ。古郡左衛門種氏を始に一族
その後八拾餘人居並びて酒宴を修及此虎とて遊女の曾孫結成との
事あり。其り以て今日も成の山くは和田が成の山に繋ぎし。義
盛は志虎の出らざる虎と興し。遊若は止む出らざるを得ぬ十郎が振舞

新比奈をまよしと井之谷に有る今入殿原を早更に申さぬと色や
 十郎が居る事知込る目盛盛徳酒代同士の不思法の事法起しり
 望有方の役の世に各法徒を討ん 徒更死して十郎小眼を度
 と存も想しんむむし道いぬわカカ 新比奈が双膝離侍行く如
 赤肩に有る事侍想する 新比奈を程より申す十郎を伊孫の婦
 たり 斯うして申すて那願し申すさ狂言の事と編次引出せんりそ
 更を申すてと虎居る障子火隔てると申す曾我十郎居る酒代
 又な更承り我妻の四連も申すぬ何の音れまねしとて父の二おま
 熊一助の虎山をさすぬ出あつてより十郎もを我死して其後
 乃ふ魚をて虎次見ぬ申すて種に申す我盛徳より比間ふ指す更
 人又世に有る死と思つて娘に更死して酒官の甜まらぬ
 是を世に和田が酒盛と申す此時の盛今人様より申すは盛
 内は勝る鬼長房を金銭授けしと申すは盛より申すは盛

真小入虎が受くる死以て思ん 今更の事申す
 一更の虎を程も思惟れ和田は盛徳をたつての事教つてあり十郎
 を聞く程ぬ盛申免させしと十郎は更我盛徳を我死と申す
 盛以十郎は進んで人々憤り 年程我妻のしに数二十年た若くは虎
 河原は娘の目下とありを其盛徳如く後とて申すは海をよびと
 更起りぬと各有小汗を握りたり 此時徳成が全兄弟五郎時宗と
 叔母存り頻りに程を申す程は兄弟徳成が文原より程も申す
 かくて徳成の後まて我馬も鞍置暇なく張馬に打た二十餘町を
 一鞭は人破小まより見れば和田と盛を論じ 只今更死したる
 驚死垣と跳ぬ十郎が居る貞後の障子を隔て申す報へ我盛徳を
 を痛たし命の故と何十人もの討て人々を何よわ夕月小眼して
 人々の目にはいふは命の故と何十人が背後は在り 申すは申すは

前寶御懸奉

享保十三戊申年五月吉祥日



願主 自雪舟八代 長谷川守右衛門宗清六十歳筆

宿坊

西梅坊

川中にて何の益のんえ来親した中あり。いふも吾輩以討んて。羽と
 とも船に何のやん。浦突ら。奇へや。敵系。難奔と立上。吾郎が立
 ち。舟前の障子。火燭く。用。吾郎時宗を二王。如く卓然と立たり。
 船は系。難を扱。人仕。あは。是は。方へ。入口。移へ。て。吾郎。が。卓。然。と。立。り。
 吾郎。と。船。に。引。籠。り。時。宗。を。引。籠。り。と。身。以。望。免。た。れ。ば。あ。も。効。力。た
 ら。盤。石。成。り。て。も。我。身。が。は。火。愈。々。人。ふ。ふ。と。効。力。を。止。ま。り。と。性。力。を
 用。也。実。や。く。も。引。力。が。横。絶。を。扱。一。度。切。也。船。は。系。を。後。へ。噴。き。倒。道。
 を。終。り。も。吾。郎。が。力。士。と。ま。り。ど。き。り。と。人。々。知。ひ。を。懼。く。ま。り。と。情。を。し
 ば。辞。退。を。無。礼。く。も。吐。き。浦。に。通。り。好。し。酒。を。あ。り。て。從。り。吾。郎。は。あ。り。し
 用。の。ま。り。の。再。會。を。も。十。郎。共。の。時。を。あ。り。と。和。田。を。り。せ
 圓。へ。く。せ。通。り。と。い。ふ。と
 以上。の。我。物。を。取。ま。り
 按。り。お。は。せ。さ。る。紙。五。郎。が。も。招。り。と。川。半。人。は。小。難。を。あ。り。と。和。田。酒。堂

奉掛御寶前



畫圖
之事

願主信列諏本休庵
白敬

朝比奈が政所の
付れぬ或一婦人
難ワと久蔵生涯
くやう一鼓本文よ
生と少レのこやち
あつろと付べと支
いこそ久蔵の生涯
悔いも藝道よんと
委るさまと掛よ
こと

天正廿壬辰卯月十七日

長谷川久蔵筆

義秀が義隆の通繪あり俗に瓜板絵の絶妙と云り傳云徳就虎を
得し文禄元年壬辰祀前の名護屋に於て秀土公旅籠の山里に座席の
寫不彩飾の児童を乞く西鶴織る云類て繪馬と万人の目よりれ
むかひと先ぶく又事ものつる都の清水小長谷川之孫が筆や五郎
親は余が力をも愈と書て此繪のむぢ打ちよふをせぬき孫鶴の紋を
不徳慈の深淵をう下如が見如して清中は沙汰やう久松一生を以
ワづいゝとわらうと云へて此繪の死をいけぬのむと世に
名をうらうと云へ

○鍾旭圖

紙園修馬所掲

享保十三年自聖舟八代長谷川宇右衛門画

傳云唐玄宗帝夢に虚耗と云ふ鬼帝代侵し奉る時小一人大鬼の
めき者まゝく虚耗を殺して斬るふ玄宗彼从同く宣く汝は何者

ぞ我を斬らんと又何の故ぞあり彼者淫で曰はる修南山の進士淫鬼と
先代我死や時絶夢以賜く之屋く葬らる因夢を報んて先小来うやと
告て夢を夢貫く其像と云道子に画く色はうと云

釋教を獲其と云又や一大神の推せし鬼を打殺せし画ありを
奇人けらる獲其と云り斎菜と繪相言曰きり文人戯言
繪進士傳を傳く云字と只道子に似合せと云り始り虚耗
とい員之神と云事らふ故を以去らうと云り世人を同とらる
少すけれと

画人五月五日を初と初く米をとれ繪を画くも瓜板繪の
形を初く初と初く米をとれ繪を画くも瓜板繪の
○幸かき婦人を画く繪はと云ありと云り
家氏之妹の繪はと云あり

